

# 異文化交流ディスカッションにおけるトピックについて —実践からの考察をもとに—

深川 美帆・三浦 香苗

## 要 旨

はじめに、金沢大学の日本人学生と海外協定校出身の外国人留学生との「異文化交流ディスカッション」の目的を明らかにし、ディスカッションのための準備段階も含めた枠組みについて検討した。次に、ディスカッションのトピックを、1) ある文化固有のもの、2) どの社会にも存在するが各々事情が異なるもの、3) 個人の観念・感覚的なもの、4) 世界的・時事問題的なもの、の4つに分類した。このトピックの分類と手順の有効性を確かめるために、分類2) に属し、学生にとって非常に身近な話題である「友だちとの付き合い方」をトピックとして選び、2009年秋学期に異文化交流ディスカッションを実施した。分析した結果、ディスカッションに対する満足度は日本人学生も留学生も高かった。満足度に有意な影響を与えた変数は、「ディスカッションの進め方」、「自分の意見を述べたり質問をしたりすること」、「同じグループの参加者と親しくなること」、「ディスカッションの論点」、「テーマへの興味」であった。以上により、今回取り上げたトピックとその進め方は、筆者らが目指す効果的な異文化交流ディスカッションの目的にかなうものであることが確認された。

キーワード：異文化交流 (intercultural exchange)、ディスカッション (discussion)、  
外国語教育 (foreign language teaching)、トピック (topic)、ビデオ会議  
(videoconferencing)

## 1. はじめに

本稿は、大学における異文化交流教育と言語教育のためのディスカッション (以下、異文化交流ディスカッション、またはディスカッション) におけるトピックとディス

カッションの進め方について検討し、それを実践によって確かめたものである。

著者らは、かねてより日本人学生と日本語を学ぶ外国人学生の異文化交流ディスカッションを行ってきた。その教育実践と研究を通して明らかになったことは、ディスカッションで扱うトピックがいかに大切かということである。参加者にとって意味のあるディスカッションを行うには、扱うトピックの内容と、そのトピックをもとにどのようにディスカッションを進めていくかという手順を明確にし、参加者へ提示していかなければならない。そこで筆者らは、異文化交流ディスカッションで取り上げるトピックについてどのようなトピックを選定し、どのような手順でディスカッションを進めていけば有益なディスカッションを行えるかを、これまでの実践をもとに再考し、新たにトピックの分類とディスカッションの手順についての枠組みを考えた。それをもとに実践したディスカッションの観察データと事後アンケートおよびレポートを分析、考察し、今回のトピックの選定とディスカッションの進め方がこの教育活動の目的を実現できているかを確かめた。

## 2. 異文化交流ディスカッションとは

### 2.1 異文化交流ディスカッションの背景にある考え

世界のグローバル化が進む中、異文化との接触の機会は以前に比べて格段に増えている。こうした現代社会においては、自らの属する文化・社会と異なる背景を持つ人々とも円滑にコミュニケーションを行える能力が社会活動、経済活動においても今後一層強く求められるようになる。同時に、近年の日本社会においても、社会制度の変革に伴い、一般市民が参加する裁判員制度など、公の場において自らの考えを述べる機会が増えてきた。このように、自分の考えや意見を相手にわかりやすく伝える能力が今後ますます必要とされることは必至であり、そうした技能をしっかりと身につけた人材を社会に一人でも多く送り出すことが、大学が社会に対して果たすべき重要な役割の一つであると思う。

異なる背景を持つ人々とのコミュニケーションには、外国語の習得がまず思い浮かぶが、単に外国語についての知識がある、あるいは外国語の運用能力が高いだけでは、本当の意味での異文化コミュニケーションは成立しない。言語を通して、その背景にある、他者の社会的・文化的背景を理解してこそ、相互理解が生まれるのである。そのために、将来我々の社会を担う学生に、教育の場において、異文化理解のためのきっかけと自己の社会や文化への気づきとなるような学習活動を提供していくことは大いに意義があるといえる。このような考えのもと、筆者らはこれまで異文化交流ディス

カッションを取り入れた言語教育、および異文化理解教育を行ってきた。

## 2.2 異文化交流ディスカッションの定義とその目的

本稿でいう異文化交流ディスカッションとは、外国語学習者が目標言語を使用して、その母語話者と自らの考えや意見について話し合うことで目標言語能力を向上させるとともに、目標言語の文化的背景についての洞察を深めることをねらいとした学習活動である。一方、母語話者にとっても、異なる文化を背景に持つ人々と話し合うことで、自らの社会や文化について多角的な視点を養うとともに、思考力、言語表現力を高めるきっかけとなる。これは学習者、母語話者の双方にとって得るものが多い有意義な学習活動であるといえる。筆者らは、特に日本語学習者と日本人学生を対象としてこれまで異文化交流ディスカッションを行ってきた。表1は、異文化交流ディスカッションにおける双方の目的をまとめたものである。

表1 異文化交流ディスカッションの目的

外国語学習者（日本語学習者）の目的	母語話者（日本語母語話者）の目的
<ol style="list-style-type: none"><li>1. 目標言語（日本語）で、自分の意見、考えを述べることを通して、目標言語（日本語）の運用力を高める。</li><li>2. 目標言語を使用する社会（日本）の社会、文化について、ステレオタイプの理解にとどまることなく、その社会に実際に生活している同世代の人間の意見、考えに触れ、一層の理解を深める。</li><li>3. 異なる文化を背景に持つ人々と、共通する社会問題・話題について話し合うことで、多角的な視点を養う。</li></ol>	<ol style="list-style-type: none"><li>1. 母語（日本語）で、自分の意見、考えを述べることを通して、母語（日本語）の言語表現力、思考力を高める。</li><li>2. ステレオタイプの理解にとどまることなく、異なる社会・文化への理解を深めるとともに、自らの社会・文化について見つめなおし、それまで意識していなかったことに気づき、さらに思考を深める。</li><li>3. 異なる文化を背景に持つ人々と、共通する社会問題・話題について話し合うことで、多角的な視点を養う。</li></ol>

## 3. 異文化交流ディスカッションにおけるトピックについての考察

### 3.1 トピックの重要性

筆者の一人は、学部日本人学生と金沢大学に留学している日本語学習者を対象とした授業において異文化交流ディスカッションを取り入れ、長年にわたり教育を行ってきた（三浦 2003）。さらに、筆者らはこれまで、金沢大学で学ぶ日本人学生と金沢大学の協定校である海外の大学で学ぶ日本語学習者との異文化交流ディスカッションを、ビデオ会議システムを用いて行ってきた（太田・三浦 2007）。また、さまざまなトピックでディスカッションを行うとともに、ビデオ会議と対面会議の比較について

も研究してきた（三浦・深川 2009a, 2009b, 深川・三浦 2009）。

こうした一連の教育実践および研究の中で次第に見えてきたことは、どのような形態でディスカッションを行う場合でも、そのディスカッションが成功するか否かは、トピックの選定と、そのトピックをもとにどのようにディスカッションを進めていくかという手法が重要だということである。これまでは、異文化を理解する上で有益だと思われるトピックを筆者ら教師側で選定して提供したり、時には参加者自身にトピックを選定させてディスカッションを行ったりしたが、実際のところ、参加者らのそれぞれのトピックに対する考えも、この教育活動へのそれぞれのトピックの合目的性の有無も明確ではなかった。また、離れた場所から互いにビデオ会議システムを使ってディスカッションを行うビデオ会議と、同じ場所で直接話し合う対面会議の比較研究では、筆者らは当初、遠隔場面と対面場面という環境の違いがディスカッションの進行に大きく関わると予測していた。しかし、実際に行ってみると、もちろん環境の違いによる諸々の相違（turn-taking の様相など）は見られたが、それに加えてディスカッションのトピックがディスカッションそのものに与える影響がかなり大きいということがわかった。こうしたことをふまえ、筆者らは異文化交流ディスカッションにおいてどのようなトピックを選定し、具体的にどのように進めていけばディスカッションを成功させられるかを再考するに至った。

### 3.2 トピックの選定と分類

筆者らが行う異文化交流ディスカッションは、外国語学習者（日本語学習者）とその目標言語の母語話者（日本語母語話者）とが、自らの考えや意見について話し合うことで、他者の文化・社会と自らの文化・社会についての理解と洞察を深めることを目的としている。ディスカッションというと、ある論点に対して賛成または反対といった立場を取り、論を主張し相手を打ち破る、いわゆるディベートをイメージするかもしれないが、筆者らの目指すディスカッションはそれではなく、あくまでも参加者らが自らの考えや意見を述べ、そして他者の意見を理解することに主眼を置いている。筆者らはこうした目的を念頭に、この異文化交流ディスカッションで取り上げるべきトピックの性質は、文化・社会的特徴の違いに焦点を置くものと、異なる文化・社会においても共通に存在するものと、大きく2つの性質に分けられると考えた。さらに、それぞれにおいて扱う話題や対象のレベルが、社会全体に関するものと、個人に関するものに分けられると考え、1) ある文化・社会に固有な事象に関するもの、2) どの社会・文化にも共通して存在するが、それぞれに事情が異なるもの、3) どの社会にも存在するが、特に、個人の観念、感覚に焦点をおいたもの、4) どの社会にも共通して

存在する、世界的問題、あるいは時事問題的なもの、の4つに分類した（表2）。特に、上記1）、2）では、トピックによっては、ある文化に対する、いわゆるステレオタイプ的な捉え方を打破し、その先まで理解を深めることも目指す。

さらに、それぞれのカテゴリーには、ディスカッションとして話がより進展しそうなトピックと、意見交換の域を出ないトピックがあると考えた。ただし、この意見交換レベルのトピックはディスカッションに使えないという意味ではなく、こうしたトピックをメイントピックの前に行うアイスブレイキング（ice-breaking）用のトピックとして用いることができると考えた。

表2 異文化交流ディスカッションのトピックのカテゴリー

	トピックの性質	トピックの例	到達点
①文化固有	a) ある社会には存在するが、もう一方の社会には存在しないもの	・日本社会の「ウチ」と「ソト」の概念	そのような特徴、特色が生まれる社会的・文化的背景についての理解を深める。トピックによっては、いわゆるステレオタイプを打破し、その先まで理解を深める。
	b) 意見交換レベル	・日本のポップカルチャー（アニメなど）	そのような特徴、特色があることを知る。
②各国事情	a) どの社会にも存在するがそれぞれ事情が異なるもの	・教育 ・学歴社会 ・男女の社会的役割	そのような特徴、特色が生まれる社会的・文化的背景についての理解を深める。トピックによっては、いわゆるステレオタイプを打破し、その先まで理解を深める。
	b) 意見交換レベル	・ジェスチャー ・食文化	そのような特徴、特色があることを知る。
③個人的観念	a) 個人の観念、感覚によるもの	・恋愛観 ・結婚観 ・職業観	異なる社会・文化に属する様々な人々と意見を交換することで、多角的な物事の捉え方があることを知る。
	b) 意見交換レベル	・旅行で行ってみたいところ	異なる社会・文化に属する様々な人々の考えを知る。
④社会問題	a) 現在、世界的な問題として社会で話題となり、議論されているもの	・地球温暖化 ・少子高齢化	異なる社会・文化に属する様々な人々と意見を交換することで、多角的な物事の捉え方があることを知る。さらに、世界が抱える問題について、自分たちなりの解決方法を見出す。
	b) 意見交換レベル	・最近のニュース	

### 3.3 ディスカッションの進め方について

ディスカッションのトピックを選定し、それを参加者に提示して、「さあ、話し合ってください」と言うだけではディスカッションはできない。筆者らは、これらのトピックについてディスカッションを行うにあたり、どのように参加者にこのトピックと向き合ってもらい、ディスカッションに参加してもらうかについて考えた。

これまでの異文化交流ディスカッションの進め方を振り返った結果、まず、事前に

トピックについて参加者一人ひとりが多少なりともそのことについて自分なりに考えるということをししないと、意味のあるディスカッションにならないことがわかっていく。そこで今回は、ディスカッションに先立ってトピックについて考えるきっかけとなるような事前タスクを用意し、参加者全員にそれを課題として提示することにした。

次に、ディスカッションの目的、すなわち自己と他者の社会・文化的背景についての洞察を深めていけるように、ディスカッションの到達点、つまりこのディスカッションを通して参加者は何をやるのかということやディスカッションの前に参加者全員に示しておくことにした。以前行ったディスカッションの中に、事前にその目的について周知せず、トピックと手順だけを示して行ったものがあったのだが、そのディスカッションでは話の方向性が定まらず、話が停滞する場面が何度も見られた。また、そうしたディスカッションの事後アンケートには、何をしなければならないか、何を求められているかがよくわからず、困惑したという参加者からのコメントが少なくなかった。そこで、今回のディスカッションでは活動のゴールとしてできるだけ具体的な「論点」を提示し、全員がこのディスカッションの目的を十分に理解し、話し合いに参加するようにした。

さらに、ディスカッションの論点に到達するために、いくつかのサブトピックを準備することにした。参加者がそれらのサブトピックに対して自分の意見や考えを述べたり、他者の意見に同意したり、質問したりするやりとりを繰り返していく過程で、ディスカッションの論点に到達していくのではないかと考えたからである。

また、ディスカッションでは参加者が無理なく話し合いに入っていけるような配慮もした。開始してすぐにディスカッションのトピックについて話し合うように言っても、それは参加者にとって心理的にも容易なことではない。特に、参加者同士が初対面の場合、互いに慣れるまでに時間を要し、肝心のトピックについて話し合いらしいこともできずにただ時間が過ぎてしまうこともある。そこで筆者らは、これまでのディスカッションにおいてもメイントピックに入る前にアイスブレイキングとして自己紹介と発言を促すための軽いトピックについて互いに話をさせる時間をとっている。今回もこのアイスブレイキングは必要であると考え、表2に挙げた意見交換レベルのトピックをこれに用いることにした。

ディスカッション終了後には、参加者一人一人がこのディスカッションで自分が考えたこと、気付いたことを書いてもらう課題を出した。ディスカッションの場で話し合い、意見や考えをその場で交換することがこの活動の最も重要な点ではあるが、その活動を通して参加者一人ひとりが考えたことや思ったことは、むしろディスカッション後に参加者一人一人の中に時間を経て内在化していくのではないかと考えた

めである。そこで、ディスカッション後にディスカッションを通して考えたことや思ったことをアンケートのコメントやレポートの形で言語化してもらうことにした。これはまた、ディスカッションを終えた後の一種の興奮状態を徐々に沈静化して、心理的に落ち着かせる役割も持つと考えられる。

以上のような観点から、ディスカッションのトピックの選定とディスカッションの進め方についての方向性を検討した。そして、こうした手順によって構成された一連の活動が果たしてねらいどおりに進行するかを、実際にディスカッションを行って確かめることにした。

## 4. 異文化交流ディスカッションの実践

今回検討したディスカッションのトピックと進め方が、筆者らの目指す活動の目的を果たしうるものであるかを確かめるために、日本国内の大学で学ぶ日本語学習者と日本人学生を参加者とした直接対面型の異文化交流ディスカッションを行い、その様子を観察、分析した。

### 4.1 今回実施した異文化交流ディスカッションのトピック

今回のディスカッションのトピックは、「友だちとの付き合い方」を取り上げた。これは前述のトピックの分類でいう「2）どの社会・文化にも共通して存在するが、それぞれの社会・文化によって事情が異なるトピック」に属する。今回、トピックの選定で特に留意したのは、できるだけ大学生である参加者にとって身近な事柄で、かつ興味を持てるようなものを選定するようにしたことである。第二言語教育におけるディスカッション活動について述べている Ur も、ディスカッションにおいて参加者の発話を引き出すには、学習者にとって身近であり興味を喚起しうる題材を用いることを述べている（1981:16）。そこで今回は、参加者らの日常生活において最も身近なものの一つであると同時に、社会における人間関係の根幹ともなりうる「友だち」に焦点をあて、これを材料に自己と他者の社会や文化における関わり合いについて話し合ってもらうことを目指した。次の図1は、今回のトピックのねらいと異文化交流ディスカッションの目的についてまとめたものである。

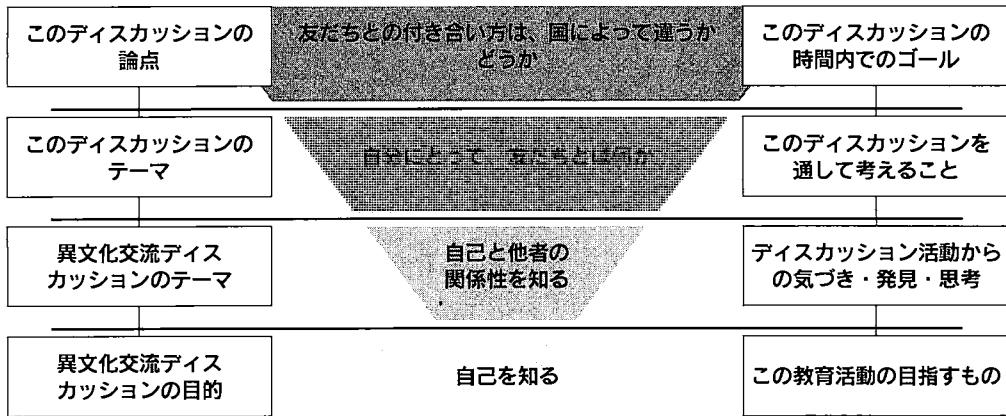


図1 異文化交流ディスカッション「友だち」の目的とねらい

#### 4.2 今回実施した異文化交流ディスカッションの概要

今回のディスカッションに参加したのは、金沢大学に留学している日本語学習者と金沢大学に在籍する日本人学部学生である。彼らは全員、筆者の一人が担当する、学部向け共通教育科目「日本事情II」の履修者である。この授業では、毎回トピックを決めて留学生と日本人学生が話し合うという活動を行っており、今回のディスカッションもその授業の一環として実施した。今回のディスカッションは、2009年11月9日の「日本事情II」の授業時間内に実施した。参加者は日本人学生が14名、留学生が21名の計35名である。これらの参加者を5つのグループに分け、それぞれでトピック「友だちとの付き合い方」についてディスカッションを行ってもらった。グループ分けにあたっては、日本人学生と留学生の比率、男女の比率ができるだけ同じになるように、また、留学生についてはできるだけ国籍に偏りがないようにという点については配慮したが、それ以外は無作為にグループに分けた。一つのグループは5名～9名の構成で、日本人学生が2名～5名、留学生が3名～4名という構成になった。なお、参加した留学生の国籍は、中国、韓国、インド、イタリア、チェコ、ハンガリーである。各グループに1名日本人学生の司会者を定め、ディスカッションの進行に気を配ってもらうことにした。今回のディスカッションの司会者はディスカッションが滞ったり、話の方向が過度に逸脱したりした場合の調整役という位置づけであり、他の参加者と同様にディスカッションに参加し、意見を述べてもらうことにした。

#### 4.3 今回実施した異文化交流ディスカッションの内容

今回のディスカッションの流れは、前述の3.3で検討した点を踏まえ、次の表3のように進めた。



表3 今回のディスカッションの流れ

日程	時間（分）	参加者がすること	活動のねらい
1週間前 ～前日	—	事前課題 (アンケートおよび資料を見て 考える問題)	ディスカッションのトピックについて、参加者に 興味を持たせる。各自、自分なりにこのトピック について考えておく。
当日	10	説明とグループ分け・司会者の 選定	ディスカッションの目的と今日すべきことを確 認する。
	5	自己紹介およびアイスブレイ キング	ディスカッションの雰囲気慣れる。参加者同士 が話し慣れる。
	40	ディスカッション	「友だちとの付き合い方に国や文化による違いは あるか」について話し合う。
	5	まとめとフィードバック	ここまでのディスカッションで、論点（ゴール） に到達するまでの経緯をふりかえる。
	15	事後アンケート記入	ディスカッションについて考えたこと、感じたこ との整理をしてもらう。
後日	—	レポート提出	参加者がディスカッションを通しての気付きや 考察をさらに深める。

#### 4.3.1 事前タスク

ディスカッションに先立ち、参加者らに事前タスクを提示し、ディスカッション前日までに提出するように指示した。課題の指示、提示および回収には、金沢大学の授業用ポータルサイト（アカンサスポータル）の「日本事情II」のサイトを活用した。ディスカッションに参加したほとんど全ての参加者がこの課題を当日までに行い、提出した。事前タスクでは、参加者自身の現在の友だちとの付き合い方について筆者らが用意した質問に答えることと、『第6回世界青年意識調査報告書』の中の「4-1 友人」および「6-2 悩みや心配ごとの相談相手」についての資料を見て、考えたことを書くという課題を出した（参考資料1）。

#### 4.3.2 ディスカッション

ディスカッションを始めるにあたり、まず、今回のディスカッションの目的と今回のトピックで話し合う論点を全員で確認した。ディスカッションでは、最初にアイスブレイキングとして簡単な自己紹介を行い、その後ディスカッションのトピックである友だちとの付き合い方に話が進むよう指示した。ディスカッションの時間は約40分間とした。今回の論点は、「友だちとの付き合い方は、国や文化によって違うかどうか」であるが、それについて話し合う際に、論点と以下のサブトピック、およびそれぞれにかかる時間の目安を記したハンドアウトを、参加者全員に紙で配布した。

### ＜サブトピック＞

- 1) 自分には友だちが何人いるか、異性の友だちはいるか
- 2) 友だちを得たきっかけは何か（どこで、どのように知り合ったか）
- 3) 友だちと一緒に何をするか
- 4) どんな人を友だちと呼ぶか
- 5) 「友だち」とは何か？国による違いはあるか？

#### 4.3.3 事後タスクおよびアンケート

今回のディスカッションについて参加者が「友だち」についてどのようなことを考え、感じたかを知るために、ディスカッションについてのコメントを書いてもらうとともに、ディスカッションのトピックとその進め方についてのアンケートも行った（参考資料2）。これらはディスカッション終了直後に、教室で紙のアンケート用紙に記入して提出してもらった。さらに、今回のトピック「友だちとの付き合い方」を通してどのようなことを考えたかを、参加者自身の考察を深めるためにも、レポートを課題として提出した。レポートはディスカッション終了後1週間以内にアカンサスポータル上に提出するよう指示した。

## 5. 今回のディスカッションの考察

### 5.1 ディスカッションの観察からの考察

筆者らは、ディスカッション中に各グループを巡回し、どのようにディスカッションが行われているかを観察した<sup>1</sup>。また、ディスカッション開始前に参加者に承諾を得た上でグループごとにディスカッションの音声をICレコーダーで録音し<sup>2</sup>、後でどのようにディスカッションが進行していたかを分析した。

ディスカッションでは、どのグループも、配布したハンドアウトのサブトピックに書いてある順に司会者が中心になって話を進めていた。ハンドアウトに書いてあること以外についても話を発展させたり、このトピックに関連したことであれば話したいことを自由に話したりしてもよいと参加者らに説明しておいたのだが、そのように話が発展していくグループはほとんど見られなかった。中には、せっかく話が深まりそうな場面にさしかかっても、それ以上その話題について進展していかない場面もあった。例えば、友だちとどこで知り合うか、という話題では、日本人も留学生もそれぞれ自分たちがどんな場所で知り合うかを互いに言っただけで、そこから話が広がりがけても、すぐに別のサブトピックに話が移行してしまうという場面があった。実

は、どのような場で友だちをつくるかという話題は、それ一つでも十分に語れることが多い話題である。事前タスクでも、日本人は圧倒的に学校で知り合うことが多いが他国では学校に限らずさまざまな場があることを示す資料を提示してあった。しかしながら、ディスカッションでは、前述のように、資料の結果を関連付けたり相手の発言を受けたりして話題をさらに進展させていく行動はあまり見られなかった。

ただ、メイントピックである「友だちとの付き合い方」について話している中で、それに関連して別の話題にシフトして話が盛り上がっていくという場面は見られた。例えばあるグループでは、日本人の場合先輩・後輩とは友だちになりえないという話に進展し、それに関連してそのグループにいた留学生が韓国の軍隊における先輩後輩の関係について話し始めると、他の参加者たちは韓国の軍隊制度について実にさまざまなことを質問し出した。このような展開の仕方は、メイントピックへの方向からはやや逸脱していることになるが、他国の事情について知るといえる。この異文化交流ディスカッションの重要な目的には合っているといえる。このような例は、望ましい展開の一つといえるだろう。

## 5.2 事後アンケート結果の考察

ディスカッション終了直後に、ディスカッションに対する満足度を知るためのアンケートを実施した（参考資料2）。アンケートでは、このディスカッションへの満足度を4段階評価でたずね、さらにどうしてそう思うか、その理由についても18の選択肢の中からあてはまるものをすべて選んでもらった。さらに、選んだ理由の中から、上位3つを選んでもらった。そして、今後もこのようなディスカッションをしたいと思うかどうかについて、4段階評価でたずねた。

### 5.2.1 ディスカッションに対する満足度とその理由

まず、ディスカッションにどのくらい満足しているかを、「満足している」「どちらかといえば満足している」「どちらかといえば満足していない」「満足していない」の中から一つ選んでもらった結果、「満足している」と答えた人が35名中9名、「どちらかといえば満足している」と答えた人が21名と、ほとんどの参加者が「満足している」「どちらかといえば満足している」を選択した。「どちらかといえば満足していない」と答えた参加者は5名に過ぎなかった。

次に、満足度に対する理由として、どのようなものがディスカッションの満足度の高さに関わっているかを知るために、ディスカッションへの満足度を従属変数として、ステップワイズ方式の回帰分析を行った。その結果、偏回帰係数が有意であった変数

は、選出順に、1) ディスカッションの進め方、2) 「自分の意見や質問を話すこと、3) 同じグループの参加者と親しくなること、4) ディスカッションの論点、5) テーマへの興味、の5つであった(表4)。このことから、ディスカッションのトピックとディスカッションの進め方が満足度の高さに大きく関与していることがわかった。また、自分自身が意見や質問を述べるなどして積極的にディスカッションに関与できたかどうか、そして他の参加者と親しくなれたかどうかとも満足度を高める要因であることがわかった。

表4 ディスカッションの満足度の高さとその理由

順位	変数*	重相関係数 (R)	$\Delta R^2$	標準偏回帰係数 ( $\beta$ )	相関係数 (r)
1	l. ディスカッションの進め方がよかった	0.483	0.065	0.273	0.482
2	b. 自分の意見や質問を話せた	0.594	0.058	0.25	0.42
3	r. 同じグループの参加者と親しくなれた	0.66	0.07	0.271	0.387
4	k. ディスカッションの論点よかった	0.716	0.103	0.341	0.425
5	h. このテーマに興味があった	0.761	0.066	0.268	0.341

\* 変数左のアルファベットはアンケートの選択肢の記号を表す

$p < .05$

さらに、満足度を日本人学生と留学生に分けてみると、留学生のほうが日本人学生に比べ、有意に高かった ( $t$  検定,  $p < .01$ )。その満足度の理由について、日本人学生と留学生の間で何らかの違いがあるかどうかを見るために、それぞれの選択肢について、理由として選択した度数を集計し、 $\chi^2$  検定を行った。その結果、「b. 自分の意見や質問を話すこと」と「h. このテーマへの興味」の2つの理由において、有意な差がみられた。「b. 自分の意見や質問を話すことができた」を理由として選択した日本人学生は14名中3名であったのに対し、留学生は21名中19名であった ( $\chi^2$  検定,  $p < .01$ )。このことから、今回のディスカッションでは、留学生のほうが日本人学生より自分の意見や質問などを話せたことを理由として多く選んでおり、それが留学生のディスカッションに対する満足度の高さにつながっていることがわかった。また、「h. このテーマに興味があった」についても、日本人学生は14名中2名のみが「このテーマに興味があった」を選んでいるのに対し、留学生は21名中12名が「このテーマに興味があった」を選んでいた ( $\chi^2$  検定,  $p < .01$ )。このことから、留学生のほうが日本人学生に比べて今回のトピックに興味を持っていた人が多く、それが留学生の満足度の高さに

につながっていることがわかった。

一方、ディスカッションに対する満足度が他の参加者より低かった参加者5人（日本人学生4名、留学生1名）について、その理由を見ると、「他の国の事情を知ることができなかった」（2名）、「このテーマについて考えを深めることができなかった」（2名）、「時間がもう少しほしかった」（2名）を挙げていた。このことから、満足度が低かった参加者は、今回のディスカッションで話し合った程度では内容的にも時間的にも物足りなさを感じていたことがわかった。

また、満足度が低い理由として、司会がうまくできなかったことを理由として挙げている日本人学生も1名いた。このグループのディスカッションの様子を観察したところ、参加者それぞれが自発的に自分の意見や質問を出し合っており、ディスカッションとしてはそれほど悪くはなかった。しかしながら、ディスカッションの論点を話し合う段階で多少時間が足りなくなり、十分に話し合いがなされないまま終ってしまった印象を受けた。参加者にとっては、話し合いの内容もさることながら、自分自身がそのディスカッションの中で求められた役割をきちんと果たし得たかという点も満足度と大きく関わっていることがわかった。このディスカッションで司会者に求めたことは時間や進行の調整役という程度のものであったのだが、司会者になった参加者はそれ以上に役割を意識したのかもしれない。司会者はどこまでの役割を求められているかを指導者側がよく説明し、伝えておく必要があることがわかった。

### 5.2.2 次回のディスカッションへの意欲

最後に、今回のような形式のディスカッションをまたしたいと思うかという質問に対して、「是非したい」と回答した参加者が35名中12名、「したい」と回答した参加者が23名と、参加者全員が今後もしたいと答えていた。これが正規の授業であり、基本的にはこの形式に類似したディスカッションを毎回していることを考えると、したくないと答える人がいないのは当然かもしれない。しかし今回は事前タスクやディスカッションの進行などを工夫したことから、参加者の事前準備（予習）や、授業でしなければならないことがいつもより多かった。それでも参加者から肯定的な反応が見られるのは、参加者らがこうした活動に対して意欲的であることの現れであるといえるだろう。特に興味深いのは、満足度が低い参加者らも全員次回もとしたいと答えていたことである。このことから、参加者らは今回のディスカッションにはおおむね満足しており、満足度の低かった参加者らも、次こそは満足のいくディスカッションをしたい、と前向きな意欲を持っていることが窺われる。

### 5.3 アンケートのコメントおよびレポートからの考察

ディスカッションの直後に、参加者にこのディスカッションをして考えたこと、気付いたことをコメントとして記してもらった。さらに、それについてレポートとしてまとめ、提出するという課題を出した。なお、これは授業の課題の一つとした。コメントは参加者全員が、レポートは35名の参加者のうち、30名が提出した。

コメントやレポートの記述からは、ディスカッションの論点に向き合って考えたり、そのサブトピックでの話し合いから新たな発見があったり、参加者がこのディスカッションを通して実に様々な考えをめぐらせている様子が窺えた。

例えば、「友だち」と呼べる人は何人か、というサブトピックでは、日本人学生と留学生とでは、人数や年齢の幅に大きく開きがあったというグループが複数あった。日本人は「友だち」というと10人以上の数を挙げるが、留学生はせいぜい1人2人と答える人が多かったという。また、日本人の友だちには同年齢や同学年がほとんどだが、他の国ではもっと年齢の幅が広いとのことである。そうした話が出たグループの参加者は、なぜこのような違いがあるのかを、自分なりに考察していた。例えば、日本人が言う親しい友だちとは、普段一緒に遊ぶ人のことを指すが、自分の国（中国）ではお互いに喜びや苦しみを分かち合える人である、と友だちの意味についての定義を見出した留学生もいた。また、日本人学生の中には、日本人には同年齢や同学年の友だちが圧倒的に多いことについて、それが今まで普通だと思っていたが、考えてみると、日本では学校をはじめさまざまな場で年齢によってグループ化されることが多いために、友だちの年齢の幅もそんなに広くないのではないかと、自分の社会の現状と併せて考えている人もいた。

特に留学生たちは、日本人学生との対話を通して、日本人学生の人間関係の築き方についてそれぞれに独自の考察をしている。例えば、日本人がお互いに友だちになることに時間がかかるのは、「最初はお互い自分の個性を隠し、注意を払って相手と話すためではないか」、「自分の個性を抑えて、周りとの『和』を維持したいからではないか」、といった記述がみられた。

また、自分の悩みを誰に相談するかについて話し合った際に、日本人学生は友だちに相談するが、他の国の学生は親に相談すると答える人が多かったそうである。そうしたことについて話し合ったグループの日本人学生の中には、「今まで相談は友だちにするのが当たり前だと思っていたが、（留学生に）親は人生の先輩なのだから、相談すればきっといいアドバイスをくれると言われ、確かにその通りだと思った。」と、友だちのみならず自分と親との付き合い方について考え直した学生もいた。こうした心の動きは単に本やメディアなどから知識や情報を得ただけではなかなか起こりえず、や

はり同年代の他国の若者と直接話し合った体験だからこそ、引き起こされたものではないだろうか。これこそが異文化交流ディスカッションの持つ醍醐味だといえよう。

また、このトピックでは、異文化交流ディスカッションの目指すところの一つである、いわゆるステレオタイプを打ち破ることについても思いがけず成功した。あるグループの日本人学生と他のアジアの国々から来た留学生らは、欧米人というのは皆社会的で誰とでも話す、というある一定のイメージを持っていたらしいが、今回のディスカッションで東ヨーロッパ出身の留学生と話してみて、必ずしもそうではないことを知ったと、日本人学生も留学生も述べていた。普段なかなか接する機会がない国々からの参加者と直に話ができること自体、貴重な体験であり、さらにその接触場面においてこれまで自分たちの持っていた考えを見つめ直すきっかけを得たわけである。幸いなことに金沢大学には世界の様々な国や地域から学習意欲の高い留学生が集まっている。彼らを日本語のクラスや留学生のための特別コースでのみ学ばせておくだけでなく、日本人学生との意義のある接触場面にさらすことは、日本について学びたいと思っている留学生ばかりでなく、日本人学生にとっても計り知れない多くの意義をもたらす。このことは、この異文化交流ディスカッションを見れば明らかであろう。

最後に、この「友だち」トピックを取り上げたことで、特に日本人学生に友だちを作る際の姿勢や考え方にもプラスの影響を与えられたことが、彼らが記すコメントやレポートから知ることができた。

以上、参加者によるアンケートのコメントおよびレポートの記述から、今回のトピック「友だちとの付き合い方」は、異文化交流ディスカッションのねらいである「自己と他者の関係について考える」という目的を十分に達成できたといえるだろう。

## 5.4 今回のディスカッションのまとめ

### 5.4.1 トピックの選定の適切さ

今回は、異文化交流ディスカッションの目的を十分に検討した上で、その活動に合うトピックの選定を心がけた。その結果、できるだけ参加者の身近な問題として捉えられかつ興味を引くものとして、友だちについてのトピックを選んだわけであるが、ディスカッションではどのグループでも話が停滞することなく発言があった。また前述のアンケートの分析結果においても、トピックへの興味の高さがディスカッションの満足度への高さに関わりが大きかったことから、今回のトピック「友だちとの付き合い方」はこのディスカッションの目的にかなうトピックであったといえよう。

#### 5.4.2 ディスカッションの進め方の適切さ

今回はディスカッション当日に活発に話し合えるように、「友だち」についてある程度自分なりに考えを持って臨んでもらおうと、事前タスクを課した。これに関して、満足度の理由としてあてはまるものを全て選んでもらった結果では、「事前の課題が役に立った」を選んだ参加者は35名中17名だった。このことから、ややボリュームのある課題ではあったが、参加者にはディスカッションを進める上で必要な手順のものとして、一定の程度の評価を得たと考えてよいであろう。

また、ディスカッションの進行を促すための補助としてサブトピックを用意したが、これについてはどのグループも忠実すぎるほどそれに沿って話を進めていたことから、サブトピックが助けになるというよりは逆に参加者らの自由な進め方を阻害してしまった可能性も否めない。しかし、これらの様々なサブトピックを話し合ったことで、参加者らが「友だち」について考えたことが少なくなかったことがレポートの記述からもうかがえることから、サブトピックはやはりある程度必要であると考えられる。それに、こうしたサブトピックを全てなくして論点だけを与えても、参加者が戸惑って話がなかなか進展しないであろうことも十分に予想できる。したがって今後の課題としては、こうした手助けをどの範囲まで指導者側が与えるか、そして参加者ら自身がこうしたサブトピックを自らで見出し、話題としてディスカッションの中で発言する力をどのようにしてつけていくかを考えていくべきであろう。

#### 5.4.3 今後の課題

ディスカッションが目的に向かって円滑に、そして活発に進んでいたか、そしてそれらが参加者にとって満足 of いくものであったかについては、まだ課題が残る。

一つは、今回のディスカッションでは、参加者らは筆者らが期待するほど、このトピックそのものについて話を発展させたり深めていったりすることがなかったことである。しかし、ディスカッション後のレポートでは、どの参加者も実に多くのことについて考えを述べていた。今後はディスカッションの中で、他国の事情についての情報交換で終わるのではなく、さらにもう一段階進んだ、参加者らがレポートで表明したレベルまでの考えを交換できるようなしくみを考えていきたいと思う。それができればディスカッションとしても深みが増し、参加者らの得るものもより大きくなるのではないかと思う。

もう一つは、日本人学生の取り組み方である。満足度が低かったのは日本人学生がほとんどであったが、その理由を見ると、トピックに不満があったわけではなく、このような学習活動に興味、関心を持ちながらも、言いたいことが十分にいえな



自身に不満を持っている様子が浮かび上がってきた。そして、そうした参加者は再び挑戦したいという気持ちが強いこともわかった。また、日本人学生のレポートの端々からも、他国の事情について知り、それと自分たち日本について考えてみようという姿勢が表れていた。こうしたことを考え合わせると、日本人学生は決して意欲が低いわけではなく、どのように自己表現をしていったらいいか、その方法がわからないために不満が残るのではないかと思われる。このディスカッションが彼らの母語である日本語で行われているにもかかわらずこのような結果が出たことは、一考の余地があるだろう。今回の日本人学生は1年生が多く、自分の意見をやや改まった（publicな）場で述べるという経験自体少ないであろうし、そのような訓練もこれまであまり受けてこなかったのかもしれない。このような活動を行うには、日本語学習者の日本語力の問題はこのレベルにおいてはあまり問題ではなく（おもしろいことに、留学生の提出したアンケートのコメントやレポートには自分の日本語力が足りないから十分に話せなかったとか自分の日本語力について不満に思っているようなコメントは1つもなかった）、むしろ日本人学生のパブリック・スピーキング能力の育成をしっかりと行っていかなければならないことがわかった。

## 6. おわりに

以上、本稿では、異文化交流ディスカッションの目的と意義、そしてそれに向けていかにしてこの教育活動を実現するかを、トピックの選定とディスカッションの進行を中心に述べた。そして今回検討したディスカッションのトピックと進め方が、活動のねらいに合うものであるかどうかを、ディスカッションの実践を通して確かめ、その結果と今後の課題について述べた。

筆者らは、今後、同一空間における直接場面での異文化交流ディスカッションをより充実させることに加え、ビデオ会議のような遠隔場面での異文化交流ディスカッションも実施していくつもりである。そのプロトタイプとなるディスカッションのあり方を構築するために、今回の実践を試みた。今回はトピックの1つを試みに実行したにすぎず、これだけでは異文化交流ディスカッションの全容はまだ十分に明らかにできない。今後は、より多くのトピックでも実践を重ね、この異文化交流ディスカッションの目指すあり方に向けて、改良を重ねていくつもりである。

### 注

1. 筆者らは観察に徹し、ディスカッションに介入することはしなかった。ただし、

参加者からディスカッションの進め方について質問を受けた場合はそれに答えた。

2. 参加者の発話の録音に当たっては、ディスカッション開始前に、録音した音声とその内容を研究の目的でのみ使用することを口頭で説明し、同意を得た上で行った。

#### 参考文献

- (1) Ur, Penny. (1981) *"Discussions that work : task-centred fluency practice"*, Cambridge University Press.
- (2) 太田亨・三浦香苗 (2007) 「ビデオ会議による異文化交流ディスカッションの方法―試論―」『金沢大学留学生センター紀要』10号, pp.45-57
- (3) 内閣府政策統括官 (共生社会政策担当) 編 (1998) 『第6回世界青年意識調査報告書』HTML版, <http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu.htm> (2010年1月20日現在)
- (4) 深川美帆・三浦香苗 (2009) 「ビデオ会議システムを使用した異文化ディスカッションにおける turn-taking の諸相―直接型対面会議との比較を通して―」『遠隔ディスカッションの有用性に関する実証的研究』, pp.46-66, 平成19-20年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (研究課題番号19520450) 研究成果報告書 (研究代表者: 三浦香苗)
- (5) 三浦香苗 (2003) 「教養教育の『日本事情: 多文化交流ディスカッション』授業研究」『金沢大学留学生センター紀要』6号, pp.31-48.
- (6) 三浦香苗・深川美帆 (2009a) 「ビデオ会議及び対面会議の実践報告―平成20(2008)年―」『遠隔ディスカッションの有用性に関する実証的研究』, pp.31-41, 平成19-20年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (課題番号19520450) 研究成果報告書 (研究代表者: 三浦香苗)
- (7) 三浦香苗・深川美帆 (2009b) 「ビデオ会議の問題点とその改善点―改良版ビデオ会議に向けて―」『遠隔ディスカッションの有用性に関する実証的研究』, pp.67-77, 平成19-20年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (課題番号19520450) 研究成果報告書 (研究代表者: 三浦香苗)

#### 参考資料

以下の参考資料は、今回のディスカッションで参加者に配布したものである。記入欄やスペース、ルビなどは割愛した。

#### 参考資料1 事前タスク

トピック「友だちとは」 プレタスク

I. 自分のことについて、以下の質問に答えてください。

1. 今、あなたには親しい友だち (恋人を含む) がいますか。次の中から、あてはまるものを選んで ( ) に○を書いてください。いくつ選んでもいいです。  
(a) 同性の親しい友だち (b) 異性の親しい友だち (c) 恋人 (d) いない→おわり
2. それぞれ何人ぐらいいますか。  
(a) 同性の親しい友だち (b) 異性の親しい友だち (c) 恋人
3. 1で答えた、あなたの友だちの年齢の範囲は何歳から何歳までの人たちですか。
4. 友だちとは、どこで知り合いましたか。あてはまるものを選んで ( ) に○を書いてください。いくつ選んでもいいです。  
(a) 大学で (b) 職場で (アルバイト先を含む) (c) 街の中で (バス, 電車, 地下鉄, 公園, 店などをを含む) (d) 旅行先で (e) 近所で (f) 学校以外の集まり・グループで (g) 故郷が同じだということ (h) 親類だということ (i) インターネット上のサイトで (j) この中にはない (書いて

ください)

5. あなたは親しい友だちと何をして過ごしますか。次の中から、あてはまるものを選んで（ ）に○を書いてください。いくつ選んでもいいです。

(a) 話す→6へ (b) いっしょに食事をする (c) 遊ぶ (d) いっしょに買い物する (e) スポーツをする (f) 勉強する (g) テレビ、映画などを見る (h) この中にはない(書いてください)

6. あなたは以下のことについて他の人と話す場合、誰とよく話しますか。最もよく話す人を1として、順位を書いてください。

〔何について〕 (a) 恋愛について (b) 就職について (c) 勉強について (d) 趣味について (e) 自分の家族について (f) 自分のお金のことについて (g) 自分の健康や病気について (h) 自分の悩み事について (i) 他の友だちのことについて (j) 本や映画、テレビ番組などについて (k) ファッションについて (l) 俳優や歌手など、有名人のニュースについて (m) 政治について (n) 経済について (o) 宗教について (p) 社会問題について (q) 人生観について (r) その他

〔誰と〕 (a) 友だち (b) 父 (c) 母 (d) 先生 (e) その他

- II. 以下の資料は、世界の青年に対して実施した調査の結果です。これらの調査結果を見て、後の質問に答えなさい。質問の答えは、あなたの考えまたは推測を書いてください。

◆資料1 友だちと知り合ったきっかけについての国際比較

図略 (<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth6/html/no2-4-1.html#no2-4-1-b> を基に作成)

Q1. パーセンテージを見ると、出会いのきっかけは日本人は学校や職場がほとんどですが、アメリカやイギリスなどではそのほかの場所でも友だちと知り合うが高いです。どうしてこのような違いがあると思いますか。

◆資料2 悩み、心配事の相談相手についての国際比較

図略 (<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth6/html/no2-6-2.html#no2-6-2-b> を基に作成)

Q2. 順位を見ると、日本では友だちが一番ですが、アメリカやその他の国では母が一番です。どうしてこのような違いがあると思いますか。

III. 参考資料 『ドラえもん』について (略)

【資料2】事後タスク・アンケート

ディスカッションを終えて

これは、今日のディスカッションが参加者にとってどうだったかを知るためのものです。ここに書いた内容は、成績には全く関係がありません。思ったとおりに書いてください。

- 1 ディスカッションを終えて国によって「友だち」に関することで違いがあるかどうかあなたの中で結論が出ましたか。あてはまるものを1つ選んでください。{ 出た 出ていない わからない }
- 2 ディスカッションを通して、相手の国の人についてどんなことがわかりましたか。相手の国の人に特徴的だと思ったことが何かありますか。
- 3 ディスカッションを通して、自分の国の人についてどんなことがわかりましたか。自分の国の人に特徴的だと思ったことが何かありますか。
- 4 ディスカッションの前と後で、あなたの「友だち」についてのイメージや考えは変わりましたか。  
変わった点がある→4.1, 4.2に答えたあと5へ 何も変わらなかった→5へ
- 4.1 ディスカッション前は考えなかったが、今は考えるようになったことは何かありますか。
- 4.2 ディスカッション前の考えと、今の考えとで、変わったことは何かありますか。
- 5 ディスカッションを通して、考えたこと、思ったことを自由に書いてください。

【ディスカッションへの満足度について】

1. あなたはこのディスカッションにどのくらい満足していますか。次の4, 3, 2, 1から、当てはまるものを一つ選んで○をつけてください。 { 4 満足している 3 どちらかといえば満足している 2 どちらかといえば満足していない 1 満足していない }
  2. 1の答えの理由は何ですか。次の中からあてはまるものを選んで ( ) に○を入れてください。いくつ選んでもいいです。そして選んだ項目の { } の中のどちらかを選んでください。
    - a. 自分がたくさん発言 { できた・できなかった }
    - b. 自分の意見や質問を話すことが { できた・できなかった }
    - c. 自分の国のことについて話すことが { できた・できなかった }
    - d. 自分の国の人と意見を交換することが { できた・できなかった }
    - e. 自分の国の事情を知ることが { できた・できなかった }
    - f. 他の国の人と意見を交換することが { できた・できなかった }
    - g. 他の国の事情を知ることが { できた・できなかった }
    - h. このテーマに興味 { あった・なかった }
    - i. このテーマについて考えを深めることが { できた・できなかった }
    - k. ディスカッションの論点が { よかった・よくなかった }
    - l. ディスカッションの進め方が { よかった・よくなかった }
    - m. 司会者がよい働きを { した・しなかった }
    - n. 教師の指示や説明、授業の進め方が { よかった・よくなかった }
    - o. ディスカッションの前にした課題が { 役に立った・役に立たなかった }
    - p. 自分がディスカッションの前に { よく準備した・あまり準備しなかった }
    - q. ディスカッションが { おもしろかった・おもしろくなかった }
    - r. 同じグループの参加者と { 親しくなれた・親しくなれなかった }
    - s. その他 ( 具体的にどんなことか、書いてください )
- 注 アンケート用紙の記号jはhと重複していたためここでは削除した。集計ではhにまとめた。
3. 2で選んだ理由のうち最も重要なもの上位3つを選んで記号を下の ( ) に書いてください。
  4. 今回のような形式のディスカッションをまたしたいと思いますか。次の4, 3, 2, 1から当てはまるものを1つ選んで○をつけてください。 { 4 是非したい 3 したい 2 あまりしたくない 1 したくない }

## Topics for Intercultural Discussion: A Practical Study

Miho FUKAGAWA & Kanae MIURA

### Abstract

In this paper, we first identified the purposes of the 'Intercultural Discussion' between the Japanese students at Kanazawa University and the international students from its partner universities, and proposed a methodological framework for an ideal Intercultural Discussion that covers both the planning and working stages. We then classified the discussion topics into the following four groups: (i) culture-specific topics; (ii) topics applicable to cross-cultural discussions regardless of the difference in back-grounding factors; (iii) topics concerning an individual ideology and/or senses; and, (iv) topics dealing with global and/or current issues. For verification, we analyzed one of the Intercultural Discussions on one of the group (ii) topics 'How to Get Along with Friends' which was conducted at Kanazawa University in the fall semester 2009. In our analysis, it became clear that the degree of satisfaction was totally high among both the Japanese and the international students. It was also found that the variables that had significant influence on this result were: 'how to proceed the discussion,' 'to have an opportunity to express opinions as well as to ask questions,' 'to get to know the other participants and develop friendship with them,' 'what is at issue in the discussion,' and 'the interest in the discussion topic.' These findings suggest that not only the topic but also the steering methodology utilized in the discussion mentioned above are perfectly feasible and applicable to an effective Intercultural Discussion in the future.